

クリストファ・マーロウ

富原芳彰

「人と学説」ということにはならず、本号の特集の趣旨からは少しはずれることになるかも知れないけれども、私はここにクリストファ・マーロウのことを書いて、曲りなりにも、このたびの責をふさぎたいと思う。

クリストファ・マーロウ (Christopher Marlowe) というのは、人名辞典ふうによれば、一五六四年に生まれ、一五九三年に死んだ、英国エリザベス朝の劇作家である。マーロウは、キリスト教のイギリスにおける大本山のあつた町、キャンタベリに生まれた。そして、大本山の大伽藍の影にかくれてしまい、小さな小教会、殉教者聖ジョージ教会で洗礼を受けた。「(一五六四年)二月二十六日、ジョン・マーロウの息子クリストファ受洗」

と、今日に残るその記録の字面は、例によって、簡単である。例によって、と言うのは、マーロウの受洗からちょうど二ヵ月たった、同じ年の四月二十六日に、キャンタベリからはロンドンをはさんで反対側の中英の町、ストラットフォード・アポン・エイヴォンで、そこにあるやはり小さな教会、三位一体教会の帳簿に記された同じような字句が思い合されるからである。こちらには、「(一五六四年)四月二十六日、ジョン・シェイクスピアの息子ウィリアム受洗」と、この方はラテン語だから、さらにもっと簡単な字面で記されている。マーロウの方が少し早かったが、彼とシェイクスピアとは同年の生まれである。シェイクスピアの父ジョンは家畜や農産物の小さな仲買人であったようだが、マーロウの父ジョ

ンは靴屋であった。

シェイクスピアがロンドンへ出て来て劇作家になるまでの彼の経路は、いろいろに憶測はなされているけれども、結局は不明と言わざるを得ない。劇作家になったあとのことも、個人的なことはやはりあまりわからない。シェイクスピアの伝記の個人的データははがき一枚に収まるなどと言われるが、そして、極端な場合には、シェイクスピアという劇作家の存在そのものを疑ったり否定したりする説（私には信じられない説）も存在するが、それほどシェイクスピアの伝記には個人的データが不足している。それにくらべると、マーロウの生涯はもう少し詳しくわかる。シェイクスピアは五十二歳まで生きて、晩年隠棲した故郷の町で病気で死んだが、マーロウは、一五九三年の五月三十日に、ロンドンの近くのテムズ河畔の港町で人に殺され、二十九歳を一期とした。シェイクスピアが劇作家としてロンドンの劇壇にはっきりと姿をあらわしたのは、マーロウの死の年の前後からであり、もしシェイクスピアが芝居を書く上で他人から何かを学んだとすれば、彼はマーロウの作品からもっとも多くのもを学んだ。

エリザベス朝の演劇と呼ばれるものの構成に加わった戯曲のうちで、その初期に属するものをほぼ年代順に読んで来て、マーロウまで来ると、愕然とする。まったく新しい天才がここに出現していて、従前のものとも周囲のものともまったく異なる演劇をひとりで創始しているという感じを強烈に受けるからである。われわれは、シェイクスピアからさかのぼってマーロウを見ると、このことは時々するけれども、マーロウをそれに先行したものの方からくだって来てみるということはそれほどしていない。歴史を見る視点は常に現在にある。マーロウはシェイクスピアの巨大な姿のうしろに隠れがちである。たしかに、マーロウはシェイクスピアによって乗り越えられた。シェイクスピアの偉大な作品を知る者は、もはやマーロウの作品を絶賛するということはないだろう。むしろ、シェイクスピアと対比された場合、マーロウにはいかに多くのものが欠けているかということに話がゆきがちである。しかし、むしろ、マーロウは未発達のシェイクスピアであったわけではない。シェイクスピアがマーロウを踏み台として跳躍しただけである。天才は凡愚の予想を超えるから、マーロウがいなかったならば、わ

れわれの知るがごときシェイクスピアもいなかったであろうと断言するわけにはいかない。しかし、マローウが達成したものを既存のものとして持ちえたことは、客観的に見て、シェイクスピアを有利な地点から出発させることになったというとは言える。

マローウが達成したものは何かということについて解説をはじめたら、簡単にはすまない。しかし、その要点は一言で言い切れるような気もする。マローウはドラマを高度の詩にしたのである。彼は、人間の行動がそのまま高度の詩になることがありうることを示した。と言うよりは、むしろ、高度の詩によってしか十分に表現されない人間の行動がありうることを示した。最高のドラマは最高の詩と一致することを、われわれの時代では、T・S・エリオットがしきりに唱えていたけれども、エリザベス朝のマローウは、何も言わずに、ただ彼の作品によって、そういうドラマの理想を人々に知らせた。それをもっとよく人々に知らせたのはシェイクスピアであるが、すでに記したように、シェイクスピアが劇作家として本格的な活動をはじめたのは、マローウが彼の作品によって人々を驚かし、演劇に何か新しいことが起った

ことを、理解しないまでも、それを直感した観客の興奮した喝采がまだ鳴りひびいている中で、突然不測の死を遂げたあとであった。しかし、公平を期するためにつけ加えなければならぬが、マローウの達成したことの偉大さは、それにつづいてシェイクスピアが成し上げたこととの偉大さによって逆照明されて、その栄光を増していることも否めない。歴史の中へ「もし」を持ち込むことはあまり意味がないが、いま、あえてそれをし、もし、マローウのはじめたことが彼だけで終わって、そのあとにシェイクスピアがつづいていなかったら、マローウの仕事の意味は、今日それが持っているよりはるかに減少するだろう。文学や芸術の作品は、それ自身の価値によって輝くものだが、それと他のものとの関連が考慮されたとき、その輝きが増したり減ったりすることがある。マローウはシェイクスピアによって、ある意味ではその栄光を加えられているとも見られるし、ある意味では削がれているとも見られる。

マローウの戯曲は七編ある。マローウは、一五八七年三月にケンブリッジで文学修士(M.A.)の学位を取得するために必要な一切のことを了えたとともに、ロンド

ンへ出て来たと思われる。(実際の学位授与は七月の卒業式のときに行われたから、そのときには一度ケンブリッジへ戻ったであろう。) マーロウは、ケンブリッジの学生であったところから、戯曲を書いていたと思われる。彼の最初の戯曲と思われる『カルタゴの女王ダイドー』(Dido Queen of Carthage) は彼の学生時代の作品である。これはケンブリッジの近くで公演していたある少年劇団のために書いてやったものようである。マーロウは、将来聖職に就く学生に与えられる奨学金を得てケンブリッジに入学したのであったから、ほんとうは神学をみっちりやるべきであったが、やがて明らかになるように、彼は当時の神学に飽き足らず、むしろこれを軽蔑した。学生時代から彼はむしろ文学に興味があった。学生時代に彼はすでにオヴィディウスの『恋愛』(Amores) を英訳し、ルーカーヌスの『ファルサーリア』(Pharsalia) の第一巻を英訳した。戯曲『ダイドー』は、彼の古典文学に対する興味のもう一つのあらわれで、ウィルギリウスの『アイネアス物語』(Aeneid) からの翻訳に近いものである。

劇作家としてのマーロウの名声は、多分一五八七年

(マーロウがケンブリッジを出た年) に、彼の『タンバリン大帝』(Tamburlaine the Great) の第一部がロンドンで上演されたとき、一気に確立した。この芝居の上演はロンドン中を湧かせたようである。演じたのは海軍大臣劇団であり、主役にはむろん同劇団の中心人物、名優エドワード・アレンが扮した。マーロウのこの作品の上演によって、イギリス演劇に一つの新しい時代がもたらされた。この作品の上演は、後世がエリザベス朝演劇と呼んでいるものの真の開幕を告げたものであった。この戯曲も、少くともその草稿を、マーロウはケンブリッジの学生時代に書いていたようである。彼はこの作品を携えてロンドンへ出て来たようである。タンバリンといふのは蒙古の英雄チムール(帖木児)のことである。第一部の圧倒的好評に応えて、マーロウはすぐに同じ芝居の第二部を書いた。

マーロウの戯曲の創作年代は、どの作品についても、あまり精確になしえないが、『タンバレイン』の次にマーロウが書いた戯曲は『マルタ島のユダヤ人』(The Jew of Malta) であつたであろう。この劇のプロローグに、フランスのギーズ公の死への言及があるので、この劇が

ギーズ公が暗殺された一五八八年十二月二十三日より後に書かれたものであることは確かである。多分、『バリの虐殺』(The Massacre at Paris)がその次に書かれた。ギーズ公を主人公とし、彼によるユグノー(新教徒)大虐殺(一五七二年聖バルトロメオ祭日の大虐殺)とそれにつづくフランスの政争、ギーズ公の死、アンリ三世の死などを内容としているのだが、粗雑なテキストでしか伝わっていない。アンリ三世は一五八九年八月二日に死んだから、『バリの虐殺』はその日付より後に書かれたことは明らかである。

マローウは人生の半ばにおいて夭折したので、そしてまたマローウは、あとで述べるように、劇作にのみ専念していたわけではないので、彼が残した戯曲の数は多くない。彼が真に悲劇的な強烈さと大きさとを見せた作品は二つしかないとも言える。『エドワード二世』(Edward II)と『フォースタス博士』(Doctor Faustus)とがそれに当る。この二つの作品の創作の前後関係については、専門の学者間にいろいろ議論があったが、今日では、大部分の学者が、『エドワード二世』の方が先に書かれたと考えているようである。『エドワード二世』は一五

九一年ないしは一五九二年に書かれ、『フォースタス博士』(ファウストに同じ)は一五九二年のおそくか一五九三年の早くかに書かれたと、普通には考えられている。以上に名を挙げた七編が、マローウの戯曲の正典である。トマス・キッドの名作『スペイン悲劇』(The Spanish Tragedy)も、実はキッドとマローウの合作かも知れないなどと言う人もあるが、そのことはいまとくに考慮する必要はない。

シェイクスピアが劇作家として登場する直前のロンドンの劇場を賑わせていた劇作家たちは、いわゆる "University Wits." 大学出のインテリ作家たちであった。ジョン・リリー、ジョージ・ビール、ロバート・グリーン、トマス・ナッシュ、トマス・ロッジ、トマス・キッド(彼は大学出ではないが、通例このグループに入れられる)、それからわれわれのクリストファ・マローウなどが、その人たちであった。一五八〇年代の半ばごろから、これらのインテリ作家たちがロンドンの大衆劇場へ一斉に進出して来たことよって、イギリスの演劇は脱皮と飛躍を遂げ、いわゆるエリザベス朝演劇の開花を見ることになった。

イギリスには、中世以来のイギリス固有の演劇の伝統があつて、それはエリザベス朝の演劇によつても当然受け継がれている。しかし、中世以来のイギリス固有の演劇の伝統は、それがエリザベス朝の演劇の中に継承される直前に大きな変化を受けていた。すなわち、ルネッサンスがもたらした古典劇の影響がそれを大きく変化させていた。古典劇と言つても、この場合は、事実上はローマの演劇であつたと言つて差支えない。いや、もっと絞つて具体的に言えるのであつて、テレンティウスとブラウトゥスの喜劇、セネカの悲劇が、このとき、イギリス人に新しい演劇理念を与えた。中世以来のイギリス固有の演劇の伝統が育てて来たものは、いわば民芸品のようなもので、民衆の生活に密着し、小規模で、それにはそれなりの風趣はあつたが、大芸術とは呼べなかつた。ローマの劇作家たちの作品に接して、イギリス人は、もっと大規模な、そしてもっと洗練された形の演劇がありうることを知つた。四畳半の三味線しか知らなかつた者が、オーケストラの奏でる交響曲を知つたようなものである。寸劇のようなものしか知らなかつたイギリス人は、ローマの劇作家たちの作品を見て、幕と場の区分を持ち、五

幕で構成される芝居などという大きなもののあることを知つた。当然、模倣がはじまる。ローマの劇作家たちの作品の形式を模倣して英語で書かれた劇が、一五五〇年代にイギリスにあらわれた。ローマの劇作家を読み、それを模倣するためには、まずラテン語が読めなければならぬ。ラテン語が読めたのは、当時においても、高等教育を受けた人々に限られた。ローマの劇作家たちの作品の模倣が学校や大学においてまず行われたのは当然である。イギリスでは、ルネッサンスによつて勃興した新思想、すなわちヒューマニズムは、大学を中心として次第にその波紋を社会の全体にひろげて行つた。演劇の面においても同じであつた。演劇の古典的理念と形式は、大学（およびそれに近接する学校）からその外部へと伝えられた。

そういう事情であつたから、一時、イギリスには、中世以来のイギリス固有の伝統を引く演劇と、当時にあつては外来的なものであつた古典演劇の伝統の復活をめざす演劇とが並んで存在した。前者の方がいっそう民衆的であり、後者の方にはすぐには民衆の中にはいらず、多少講壇風であつた。しかし、そのどちらも、イギリス人が

英語で書いた演劇であったから、両者ははじめから無縁ではありえなかった。エリザベス朝演劇は二つの伝統が合流したところに生まれたというふうにも見えるけれども、もっと正しくは、イギリス固有の伝統が古典劇に触れて、その理念と形式の一部をみずからの中に摂取することによって変化した(かなり大きく変化した)ところに生まれたと考えるべきものであろうと思う。

ローマの劇作家の作品を模倣して英語で書かれたイギリスの劇が最初にあらわれたのが一五五〇年代、大学出のインテリ作家たちが一斉にロンドンの大衆劇場に進出したのが一五八〇年代であるから、その間に一世代が経っている。「ユニヴァーシティ・ウィット」たちの劇はもはや中世風の民芸品ではなかったし、講壇風の堅苦しさや気取りも捨て去っていた。イギリス演劇の伝統はルネッサンスによっていっそう豊かで肥沃なものにされて、未来への希望を孕みながら、天才の出現を待っていた。その潜在的待望に応えてマーロウが登場したというのはこじつけであるばかりでなく、真相を逸する。真の天才は、人々の期待や予想に應えて登場するものではない。彼は思いがけず出現し、人々が思いもかけなかったこと

をする。彼はかならずしも巨匠と呼ばれる必要はない。しかし彼は、人々の期待や予想を超えたところで、まったく新しい、そしてすばらしい様式を發明して、人々を驚かすであろう。マーロウは、他の大学出の人たちにまじって、ロンドンの大衆劇場に進出した劇作家たちのうちの一人であったが、天成の資質において見るならば、マーロウと彼の周囲にいた劇作家たちとを同日に論ずることは、玉と石とを混肴するに等しい。才人と天才とは区別しなければならぬ。この場合、マーロウひとりか天才であった。彼だけが生粋の詩人であった。天性詩人である人のペン先から流れ出るものは、いついかなるときでも、詩以外のものではありえない。からず鷹の飛び方ができないのと同じように、鷹にはからずの飛び方はできない。マーロウには詩でない劇は書けなかった。心が鳴っている人には、森羅万象ことごとくが鳴っているからである。

人がマーロウのことを語るとき、かならず出て来るのが、*'self-aggrandizement'* (自己拡大) という言葉である。自己を無限に拡大したいという熱望、無限なるものに憧れ、それを求めて高く高く飛翔する魂こそ、マーロウ

ウをマーロウたらしめてゐるものである。
タンブレインを日夜飽くなき征服に駆り立てるものは、
無限に憧れる彼の魂のうずきである。

Our souls, whose faculties can comprehend
The wondrous architecture of the world
And measure every wandering planet's course,
Still climbing after knowledge infinite,
And always moving as the restless spheres,
Will us to wear ourselves and never rest,
Until we reach the ripest fruit of all,
That perfect bliss and sole felicity,
The sweet fruition of an earthly crown. (Pt I, II,
vii)

宇宙の驚歎すべき大建築の全容を理解し、すべての遊
星の彷徨の軌道を測る能力をもったわれわれの魂は、
たえず無限の知識を求めて上昇し、休息なき天球のこ
とくに常に運動をつづけ、もともと日熟した果実、完
全無欠の喜び、唯一無二の至福、地上の王冠の芳醇な
味わいにわれわれが達するまで、われわれに骨身を削

らせ、ひとときも休ませない。

しかし、タンブレインの魂の憧れは、右の引用だけで
は十分に語られていない。一見冷酷無情に征服に征服を
重ねてゆくタンブレインは、彼がどんなに「骨身を削
り」とどんなに憧れ求めても、人間にはついに参入を許
されない、いかなる言葉も言及できないことのできない、は
るか、はるかかなたの「美」の、ほのかにかげろう微光
を望見してゐる。

If all the pens that ever poets held
Had fed the feeling of their master's thoughts,
And every sweetness that inspired their hearts,
Their minds, and muses on admired themes;
If all the heavenly quintessence they still
From their immortal flowers of poesy,
Wherein, as in a mirror, we perceive
The highest reaches of a human wit;
If these had made one poem's period,
And all combined in beauty's worthiness,

Yet should there hover in their restless heads
 One thought, one grace, one wonder, at least,
 Which into words no virtue can digest. (Pt I, V. i)

右に引用した部分は、原文に（あるいは構文に）乱れがあると思われ、逐語的に意味を辿ることはできないが、全体の大意はおのずから明らかである。——いままでに多くの詩人が美の想念をとらえ、それを甘美な詩に歌った。人知の達しうる最高限を鏡のように映しているそれらの詩歌の不滅の花々から、天上のもののごとき精神を抽出し、それらの精神だけで一編の詩を作り、それらの精神全部を一つにあつめて美のすばらしさを歌ったとしても、なおかつ、詩人の不安な脳裡には、いかにしても言葉になしえない、少なくとも一つの想念、一つの光耀、一つの驚異が、かげろうのごとくに漂っているはずだ。

——右に引用した箇所はそういう意味のことを言っていると思う。血腥い殺戮を重ね、都市を焼き払い、仮借なき征服をつづけるタンバレインに右の言葉はふさわしくないと思う人があれば、その人はマローウのタンバレインを十分に理解しているとは言えず、タンバレインに右

の言葉を言わせた作者マローウを十分に理解しているとも言えないであろう。マローウの脳裡には、人間がどんなに自己拡大をつづけていっても、常にはるかの彼方にあつて、人間にはついに到達できないが、しかし、その真珠色の微光は遠い遠い空にかすかに望見できる精神的極美の世界の感覚が常に揺曳していた。そうでなければ、右の言葉を言うタンバレインをマローウは書けなかったはずである。そして、右のような言葉があるがゆえに、タンバレインは地上的権力の餓鬼ではなく、人間の世界の栄光を讚美し、それを増大させるために心身を勞しながら、なおかつ、人間世界の栄光とは比較にならない、言語に絶した、別種の、超越的栄光の世界の幻影が木洩れ陽のように脳裡にちらついていたエリザベス朝人の、あるいはルネッサンス人の、心の内奥を表現した人物となるのである。

最近ではマローウの最後の作品と考えられ、また、マローウのもっとも自伝的な作品とも言われる『フォースタス博士』において、フォースタスは、論理学、医学、法学、神学のいずれにも飽き足らず、彼の精神的野望の達成にもっとも有効なものとして魔法を取る。

All things that move between the quiet poles
Shall be at my command. Emperors and kings
Are but obeyed in their several provinces,
Nor can they raise the wind or rend the clouds,
But his dominion that exceeds in this
Stretcheth as far as doth the mind of man.

A sound magician is a demi-god. (I. i)
静止不動の両極の間に動く一切のものがわたしの意のままになる。皇帝とさういふ国王とさういふ、それぞれの領国において服従されるにすぎず、かれらには風を起すことも雲を裂くこともできない。しかし、これ〔魔法〕に卓越した者の版図は人間の精神が拡がるかぎりの拡がりを持つ。鍊達の魔法師は半神だ。

フォースタスが魔法を信奉し、それに帰依したことは、キリスト教の神を永久に捨て、魔王ルーシファ(Lucifer)に魂を売ったことである。「常により高きをめざす傲慢と不遜のゆえに神によって天の面から投げ落された」(I. iii) ルーシファ(その名はいまでも「光明をも

たらす者)に彼は彼の魂を売り渡した。そして二十四年間、魔法が与えうる一切の快楽と満足とを買った。彼が魂を悪魔に売って得たさままの快楽と満足の中には、トロイ戦争の原因となった女性、絶世の美女ヘレンのあたりにし、生身の彼女を抱擁し、彼女と接吻を交わす恍惚のそれもあつた。

Was this the face that launched a thousand ships
And burnt the topless towers of Ilium?
Sweet Helen, make me immortal with a kiss.

[She kisses him.]

Her lips suck forth my soul. See where it flies;
Come, Helen, come, give me my soul again.
Here will I dwell, for heaven is in these lips,
And all is dross that is not Helena.

これが、百千の軍船を海に浮かばしめ、頂きも見えず聳え立つトロイの堂塔を炎上せしめた顔だったのか。甘美なヘレンよ、口づけでわたしを不死の身にしてください。「接吻」彼女の唇はわたしの魂を吸い出してしまふ。ああ、わたしの魂が飛んで行く！ヘレンよ、

お願いです、わたしの魂を返してください。わたしはいつまでもここに住んでいよう、この唇にこそ天国があり、ヘレン以外のものはすべてかなくそだ。

しかし、快楽と満足と恍惚の二十四年間はまたたく間に過ぎ去り、フォースタスは永遠の地獄に落ちなければならぬ。彼は「二十四年間の空しい快楽のために永遠の喜びと至福とを失った」(V. ii)。彼には、最後まで、彼が捨て去った神の顔が見えていた。いま彼を永遠の墮地獄から救い出してくれることのできるものがあるとすれば、それは、いまははるかに遠い彼方の天上の神だけであるが、その神に祈る道をみずから断ち切り、神に義絶を宣言したのはフォースタス自身ではなかったか。善天使 (Good Angel) はフォースタスに言う。

O, thou hast lost celestial happiness,
Pleasure unspeakable, bliss without end.
Hastst thou affected sweet divinity,
Hell or the devil had had no power on thee.
Hastst thou kept on that way, Faustus, behold

In what resplendent glory thou hadst sat
In yonder throne, like those bright shining saints,
And triumphed over hell. That hast thou lost,

And now, poor soul, must thy good angel leave thee.
The jaw of hell are open to receive thee. (V. ii)
ああ、おまえは天国の幸福を、言語に絶した楽しみを、無限の喜びを失った。もしおまえが甘美な神の道を愛していたら、地獄も悪魔もおまえの上に何の力もなかったであろうに。その道を歩みつづけていたならば、フォースタスよ、おまえはどんなにか燦然たる栄光に包まれてかあなたの玉座に坐し、あの光り輝く聖者たちのようになり、地獄をも征服していたであろうに。それをおまえは失い、いま、あわれな魂よ、おまえの善天使はおまえから去らねばならぬ。地獄の口が開いて、おまえを呑み込もうとしている。

フォースタスは、魂の新しい自由と支配とを際限なく求めようとする欲望と、それに背くことは罪を意味し疎外感を深くする古い教えとのディレンマの角にかけられ、一方を取り、他方を捨てた。しかし、彼が捨てたものが

何であったかを彼は常に知っていた。彼が地獄に落ちて行く直前に叫んだ言葉は、後悔の言葉などという安っぽいものではない。

See, see, where Christ's blood streams in the firmament!

One drop would save my soul, half a drop! Ah, my

Christ!

見よ、キリストの血が上空に筋を引いて流れている！
その一滴でわたしの魂は救われる、半滴でも！ ああ、わたしのキリスト！

フォースタスのこの叫びは、一方の極に達したときにはじめて見える対極の価値である。フォースタスは地獄へ墮ちた。しかし、地獄へ墮ちた彼にしてはじめて見えた天国の輝きは、彼が神の道に安住していたならば見えただであろう天国の輝きよりは、何層倍か鮮烈であったにちがいない。

マーロウは、はじめに記したように、イギリス国教会

の大本山のある町、キャンタベリに生まれた。そして、十五歳に達する少し前に、キャンタベリ大寺院に付属する学校、キングズ・スクール (King's School) に入学を許された。この学校は、もとは、キャンタベリの修道院に付設されていたのであるが、宗教改革でその修道院も解体させられてしまったので、一五四一年に国王ヘンリー八世から勅状をもらい、名も「国王学校」と改めて、新発足した学校であった。イギリスでも有数の古い学校である。この学校は、当時、九歳から十五歳までの少年で、勉強はできるが家庭は貧しいという者を毎年五十人選んで奨学金を与えて入学させるということになっていたが、実際には、家庭の貧困ということは選抜の基準としてはあまり重視されず、裕福な家庭の子弟も多数入学を許され、むしろ、キャンタベリ大主教クランマーは、奨学金が裕福な家庭の子弟にばかり与えられないように、入学者選抜委員会に注意を促したらしい形跡もある。新入生の年齢制限を九歳から十五歳までとしたのは、常識的に考えられることのほかに、これらの少年は大寺院の聖歌隊員となる義務を負ったから、ソプラノの声を出せる必要があったということもあった。マーロウは、年齢

制限の上限ぎりぎりのところでこの学校に入学を許された。マールウは抹香くさい町に生まれ、抹香くさい学校で学んだ。

十七歳のとき(一五八〇年)、彼はキングズ・スクールからケンブリッジの聖体学寮(Corpus Christi College)へ移った。大主教マシュー・パーカーの遺志によって、新しく、毎年三人に奨学金が与えられることになり、そのうちの一人にはキャンタベリ出身者を選ぶという規定があり、事実として、マールウはその一人に選ばれて、大学に進学した。パーカー奨学生は、将来聖職に就くことが期待されていた。将来聖職に就くつもりのある人には、その奨学金は六年間支給されることになっていたが、三年たつて、聖職に就くことを拒否した人には、そこでその奨学金の支給は停止されるきまりであった。マールウは、六年間つづけてその奨学金の支給を受け、一五八四年(二十歳)に文学士(B.A.)となり、一五八七年に文学修士(M.A.)の学位を取った。大学当局は当然彼が聖職に就くものと思っていたようである。

一五八七年三月、文学修士になるために必要なすべてのことを済ますと、マールウはロンドンへ出て来たよう

である。七月の卒業式(学位授与式)まで、ケンブリッジに用はなかつた。

ところで、マールウについては、果して文学修士の学位を与えてよいかどうか、大学当局を一時迷わせた事情があった。それは、その発端においては、マールウの大学への出席状況に関係していた。マールウの大学への出席状況を調査すると、最初の四年間は正常と言ってよかったが、一五八四年に文学士になったあとのそれは乱れて来て、とくに、一五八四―五年の第三、四学期、一五八五―六年の第三学期には、長期にわたる欠席をしていることがわかる。マールウはパーカー奨学生として、在学中毎週一シリングの学資を支給されることになっていたが、その支給は彼が大学に現に居住していることを条件としてなされたもので、大学を留守にすると、その期間には支給を停止された。右の奨学金の支給実績を記録した会計帳簿が今日でもケンブリッジ大学に残っていて、その帳簿の記載によってマールウの大学への出席状況を推定すると、それについて右に述べたようなことを言わざるをえないことになる。

マールウの長期欠席の理由は何かということが大学当

局によって当然問題とされた。そのことについて、当時としてはわるい噂が立っていた。マーロウは、大学を長期欠席していた間、海を渡ってフランスのランスに赴いて、そこに滞在していたという噂である。当時ランスと言えば、イギリスから亡命したカトリック信者たちが集まってかれらの根拠地としていたところであり、プロテスタントの女王エリザベスと彼女の政府を覆滅しようとするかれらの策謀の基地となっていたところである。マーロウはそのランスへ行つて、「反逆者」となり、イエズス会のゼミナールに加わり、エリザベス女王打倒の陰謀を画策しているというのが、その噂の意味するものであった。大学当局は彼に修士の学位を与えることに、かれらとしては当然であったが、躊躇した。おそらくマーロウは大学当局から、直接、長期欠席の理由をきかれたことがあったであろう。しかし、大学当局は彼の与えた説明に納得しなかつたようである。そこで、仕方なく、マーロウは政府のある高官に自分の窮境を訴えたいらしい。多分かくして、女王の枢密院からケンブリッジ大学当局あてに極めて異例の書簡が送られることになった。その書簡の要旨。——マーロウについて、彼がランス

へ行き、そこに滞在する意図があつたという噂が立っている。ので、枢密院は、彼にそのような意図は毛頭なかつたことを証明することを適当と考えた。マーロウは、彼の行動において常に秩序正しく、分別を守り、そのようにして女王陛下のために多大の働らきをなし、その忠勤は褒賞に値する。枢密院はさきの噂があらゆる手段によつて取消されることを要望し、次の卒業式において彼が取得するはずの学位の授与が支障なく行なわれることを要望する。国家の利益に触れる事柄において彼のような仕事をした誰にもせよ、その人が、彼が従事した事柄を知らない人たちによつて不名誉を与えられることは、女王陛下の御意志に反するからである。

この書簡は、第一に、マーロウはケンブリッジを離れたあとでカトリック信者になつたという噂の流れたことを暗示している。彼がイギリス国教会の聖職に就くことを拒み、外国へ行ったとすれば、ケンブリッジ大学当局その他がその噂のように思うのは容易であつた。第二に、この書簡は、その噂には根拠がなく、もし彼が海を渡つて外国へ行ったとすれば、それは「お国のため」であつたということを示している。マーロウはエリザベ

ス女王の政府からある秘密の任務を与えられ、その任務を遂行したらしく思われる。その任務が何であったかは今日詳かにすることはできないが、エリザベス女王の政府が、主として亡命カトリック信者たちの策謀にそなえて、海外に網を張りめぐらしていた諜報機関の活動に関係したものであったであろうという事は、多くの人に想像のつくことである。エリザベス女王の諜報機関を整備し、その総元締となっていたのは国務大臣枢密院議員サー・フランシス・ウォルシンガム (Sir Francis Walsingham) であった。マールロウがケンブリッジ大学当局との間に生じた困難を打開するために誰かに助力を求めたとすれば、それはサー・フランシス以外の人ではなかったであろう。サー・フランシスにはトマス・ウォルシンガム (Thomas Walsingham) という若いいとこがいた。マールロウは、このトマス・ウォルシンガムと親交を結び、彼の眷顧を受けるようになったが、マールロウとの若い貴族的な男との結びつきは、マールロウがサー・フランシスの指令の下に働いたという事を媒介として生じたものであったかも知れない。マールロウがトマス・ウォルシンガムと親交を結んだことは、もしかすると、彼

が二十九歳で突然の死を遂げなければならなかった大きな理由だったかも知れない。そのわけはあとで書く。

マールロウのロンドンでの生活も、かなり波瀾に富んだものであったようである。たとえば、一五八九年の九月、彼は詩人トマス・ウォットソン (Thomas Watson) と共に街上で人を殺した罪に問われて、ニューゲイトの牢獄に入れられた。殺された人はウィリアム・ブラッドリーという二十六歳の男で、ロンドンのある宿屋の息子であった。借金のもつれでこの男がウォットソンに恨みを抱き、ウォットソンの下宿の近くで彼を待伏せしていたところへ、たまたまマールロウがそこを通りかかり、マールロウがウォットソンの友だちであることを知っていた相手はまずマールロウにからんだらしい。マールロウも血の気の多い方だ。早速双方剣を抜いて切り合いとなった。そこへウォットソンが来たので、マールロウは手を引き、ウォットソンとブラッドリーとの切り合いにかわった。そしてウォットソンがブラッドリーを刺し殺した。大体そういうことであつたらしいが、この事件でマールロウもウォットソンと同じく投獄された。事件の調べが進むうちに、マールロウはすぐ釈放されたが、ウォットソンは五カ月近

く牢に入れられていたのち、やっと正当防衛であったと認められて、女王から許しが出た。マーロウはこのときの短い獄中生活の間にある贋金作りの男と知り合い、貨幣偽造の方法をいろいろ教わったらしい。マーロウは、のちに、おれは貨幣の作り方を知っており、イギリス女王と同じくらいそれを作る権利があると高言して、治安当局の心証をわるくした。

マーロウは一五九二年にロンドンのある町のお巡りさん二人を脅迫したこともあるらしく、その年の五月九日に、その二人の警官にふたたび脅威を与えたら二〇ポンドの罰金を払うという誓約をさせられている。一五九七年にシェイクスピアが故郷の町に買い、その町で二番目に大きいと言われた邸宅の値段が六〇ポンドだったから、二〇ポンドは当時かなりの大金であった。

しかし、これらの事件は、マーロウにとって、彼が無神論者であるという攻撃を受けたことにくらべれば、小さなことであった。当時、教会が正統とする信仰から離れた言説はほとんどすべて「無神論」(atheism)と呼ばれた。少しでも懐疑的あるいは自然論的なことを言えば、すぐに無神論者と呼ばれる傾向があった。マーロウを無

神論者のように言った最初の人は、同輩の劇作家ロバート・グリーンで、『タンバレイン』におけるマーロウの成功を妬んで、マーロウは「無神論者タンバレインとともに神を天から追い出し、あるいは太陽の気がい祭司とともに神を冒瀆した」などという言葉を、彼が一五八八年に出版した作品の序文に書いているそうであるが、そのときには別にそれ以上のが起ったようには見えない。マーロウを無神論者であるとする攻撃が彼にとつて実際の脅威となったのは、一五九三年の五月になってからである。事は妙な具合に始まった。

一五九三年の春ごろから、ロンドン市民の間に、ロンドン在住の外国人に対する反感が高まり、かれらを攻撃し、市民を煽動する責任者不明のビラが市中のそこそこ貼られるはじめた。とくに、五月五日の夜に何者かによってオランダ人墓地の扉に貼られたビラの文言はきわめて過激なものだったので、暴動の発生を恐れた女王の政府は、五月十一日に「星庁」(the Star Chamber)における重臣会議を開いた。その結果、星庁はロンドン市当局に対して書簡を送り、オランダ人墓地に件のビラを貼った者を発見し逮捕するために、ロンドン市当局によっ

て「なんらかの異常な骨折りと配慮」("some extraordinary pains and care")がなされることが女王陛下のお望みである旨を伝え、そのためには、怪しいと思われるいかなる場所を捜索してもよろしいし、容疑者として捕えた者がすぐに白状しない場合にはブライドウェルの拷問場で拷問にかけても差支えない、と加えた。

このきびしい要請状がロンドン市当局に送られた翌日、五月十二日に、早速、劇作家トマス・キッドが捕えられ、拷問台にしばりつけられるとともに、彼の住居が捜索された。そこで押収された書類の中に、異端的な宗教論文を手写したものが発見された。キッドは、多分、自分を救おうとしてであろう、それは自分のものではなく、マローウのもので、二年前(一五九一年)に二人が同じ部屋に一緒に住んでいたときに自分の書類の中にまぎれこんだものであると言明した。マローウの死後キッドが国璽尚書(Lord Keeper)サー・ジョン・バックリಂಗに送った手紙が二通現存するが、キッドはその中でマローウが言ったという瀆神的な言葉をかなり詳しく報告している。おそらく、キッドは、逮捕されてきびしい尋問を受けたときにも、マローウについて、のちに彼の手紙の

中に残ったようなことを述べ立てたにちがいない。

五月十八日、女王の枢密院は、ついに、マローウに対する逮捕令状を発した。マローウは、ケント州スキヤッドベリ(Scadbury)なるトマス・ウォルシンガムの邸宅で捕えられた。エリザベス女王の政府の諜報網の総元締サー・フランシス・ウォルシンガムのもとで働いていたことが機縁となつてか、あるいはそれ以外にも機縁があつてか、その辺はよくわからないが、マローウがサー・フランシスの若いいとこであるこのトマス・ウォルシンガムと親交を結び、その眷顧を受けたことは前にも記した。一五九三年には、例の疫病(The plague)がロンドンでまた猖獗をきわめたので、おそらくそれを避けるためにマローウはこのときスキヤッドベリのトマス・ウォルシンガムの家に逗留していたものと思われる。マローウはおとなしく捕えられた。捕えられたが、キッドのように投獄されたり、拷問にかけられたりすることはなく、枢密院によってなんらかの決定がなされるまで、毎日一度枢密院に出頭することを命じられただけであつた。このことについての枢密院の決定はついになされなかつた。それがなされる前に、五月三十日、マローウは、ロンド

ンの近くのテムズ河畔の町デットフォード (Deptford) のある旗亭で三人の男に取りこまれ、そのうちの一人に殺されたからである。マーロウの死をめぐる事情には謎が多く、その謎解きにかかったら、これから原稿用紙がさらに何枚要るかわからない。今回与えられた紙数をすでに超過しはじめているいま、到底それをここですることはできないので、そのことは他日の別稿にゆずらざるを得ない。

マーロウが捕えられて、最初に枢密院に出頭してから不慮の死を遂げるまでの約十日の間のいつかであったと思われるが、リチャード・ベインズ (Richard Baines) という職業的密告者による、マーロウの瀆神的言動に関するかなり長い報告書が枢密院に提出された。その報告書によると、マーロウは、たとえば、「キリストは私生児で、彼の母は不義をした」とか、「宗教の始源はただ人々をおどかすだけのことであった」とか、「使徒ヨハネはキリストの同衾者で、いつも彼の胸にもたれかかり、したがって、キリストは彼をソドムの罪びとたちと同じように扱ったのだ」とか、「モーゼはすべてん師にすぎず、サー・ウォルター・ローリーに仕えるハリオットという

男の方が彼よりはずっと多くのことができる」とか、その他これらに類したことをいろいろ言ったことになっている。ベインズの報告にどれほどの信頼性を与えていいかわからない。しかし、彼がまったくのでっちあげを書いたというふうにも思われない。マーロウのことであるから、酒でも飲んでいれば、いっしょにいる者たちのびっくりした顔を見たいというだけでも、そのくらいのことと言ったかも知れない。

当時、サー・ウォルター・ローリー (Sir Walter Raleigh) を中心に、進歩的あるいは近代合理主義的考え方を進めていたサークルがあったようである。いわゆる「夜の学派」(the School of Night) である。ベインズからの引用に出て来たハリオット (Thomas Harriot) は有名な数学者で、「夜の学派」の有力な一員であった。「夜の学派」はその名のとおり、闇に包まれていて、その真相は現在のところまだ十分に明らかにされていないが、当時公言を憚られるようなことをひそかに語り合っていたグループが、サー・ウォルター・ローリーを中心存在したことは事実のように思われる。そして、マーロウもそのグループと関係があったようである。マー

ロウの友人の一人トマス・ウォルシinghamもまたそれと関係があったらしい。マールロウの死は、このグループとの関係において考察されるべき面もあるし、彼の諜報活動との関係において考察されるべき面もあるかも知れない。とにかく、マールロウは、なんらかの関係で、彼が余

計なことをしゃべらないうちに彼の口を永久に封じてしまいたいと思つた人あるいは人々によって殺されたということは疑えないところである。

(一橋大学教授)